春・秋連結学期　｜　今出川校地開講科目

京都の伝統織物で感動を！
魅力発見プロジェクト

1 目的・概要

本プロジェクトの目的は、伝統織物やその文化的な背景を様々な観点から捉えることで、自分たちが感じた織物の魅力を発信することです。日本の宝とも言える伝統織物の素晴らしさを私たちなりの感性で伝えるためには何ができるのか、常にこうした問いを大切にしながら活動をしてきました。

春学期では、伝統織物に携わっている工房を取材させていただき、伝統織物やその業界に対する理解を深めることができました。また、学生を対象に実施したアンケート結果から、伝統織物＝馴染みのないものといったイメージを払拭し、より身近に感じてもらえる場の必要性を感じました。よって、秋学期では、伝統織物をただ見るだけではなく、実際に触れて制作体験もできる、伝統織物と人々の距離を縮めることをテーマとしたイベント「オテモトニオリモノ」を開催しました。

Annual Schedule

2017 年

4 ～ 6 月	伝統織物の製作工程の工房取材
7 月	アンケートを実施（学生対象） 春学期成果報告会
8 月	課題解決への企画提案
9 月	夏合宿
10 ～ 11 月	展示会準備
12 月	アンティークショップ「ANTIQUE belle」のギャラリーにてイベント「オテモトニオリモノ」開催
2018 年　1 月	伝統織物に携わる職人さんへの報告会

2 成果達成度

春学期は私たちの織物に対する興味や関心を高め、基本的な知識を学ぶことを目標に工房取材を行いました。また、学期末に織物に対する若者の意識調査を行うために同志社大学内でアンケートを実施しました。

春学期の成果としてあげられることは、私たちの織物に対する関心が高まり、このプロジェクトによって織物産業に変化を与えるといった使命を確認できたことです。プロジェクト開始前は漠然としていた織物のイメージが、分業化された一つ一つの工程を学ぶことによってその崇高さを知ることができました。しかし、その陰には後継者問題、レンタル着物によって需要が低下しているなどといった問題があり、こうしたことを「より多くの人に知ってもらうべきである」と強く感じました。また、アンケート調査に関しては、自分たちが何を知りたいのかということを深く吟味せずに実施してしまったため、結果から得られる情報が少なくなってしまいました。しかし、こうした経験によって、求めている情報とそれを導き出すアンケートを作成する必要性を学ぶことができました。

夏季休暇中の合宿では、アンケート結果から得られたことや私たちが伝えたいことを議論し合い、「織物を使った新しい商品の提案」「織物を織る体験」を二本柱としたイベントを行うこと、そしてその中で得られたデータや考察を織物産業に伝えるという結論に至りました。

秋学期では今までの活動を踏まえ、イベントに向けた準備を主に行いました。若者をターゲットにしながらも、全年齢に魅力を伝えることができるということにこだわり、イベント内容は展示会、織物アクセサリーの提案、機織り体験という三つの要素を統合したものに決定しました。秋学期の成果としてあげられることは、12 月 2、3 日に行った 2 日間のイベントを通じて 74 名の来場者を確保し、織物に関する知識と魅力を伝えられたことです。また回答者は全体の半数ではあったものの、アクセサリーの制作体験、機織り体験を終えた来場者に対して行ったアンケートでは、全員に「楽しかった」「もう一度体験したい」と回答していただけました。

しかし、私たちがデザインした織物を用いたネイルチップとアクセサリーに関しては当日のその場での反応は良かったものの、アンケートからはあまり良い結果は得られませんでした。これは若者の来場者が比較的少なかったこと、またデザインが普段使いに向いていなかったことによると考えました。これらの考察により、若者の織物に対する関心に対して効果を発揮するには、よりリーズナブルで普段使いのできるデザイン性の高い小物が必要であることが分かりました。また全年齢通じて機織り体験の反応が良かったことから、作品を提供するのではなく、機を織ること自体に着目して体験教室のようなものを行うといった可能性を見つけることができました。

そして、こうして得られた結果を、工房を取材させていただいた職人さん方へ直接報告する会を設けました。この報告会では、来場者の生の声を職人さんに届けるこ

とができたこと、また分業体制にある職人さんが互いに顔を合わせることができたので織物業界のつながりを再認識していただけたと考えます。

この１年間で、私たちの織物に関する知識と感心が増したこと、織物の魅力を発信する上でより効果的な方法を得たうえで、それを織物産業に還元できたことは、１年を通じての成果と言えます。今後は、織物産業全体の協力のもと、若者向けの商品開発と機織り体験などのイベントを行い、幅広い年代へ恒常的な需要を生むことが求められると考えます。

3 プロジェクトを通じて

私たちははじめ織物の知識が全くないところからスタートしました。工房を取材する中で、昔から変わらぬ手法で作り上げられる精巧な伝統織物の華やかさを目の当たりにするとともに、斜陽産業として抱える後継者不足などの課題を知りました。工房取材を通して表面的ではない伝統織物の魅力を発見し、それを発信する必要性を深く理解することができました。

イベントでは、それまでに学んだ織物の知識や魅力を伝えることで、より来場者に興味を持っていただくことに重点をおきました。目先の結果にとらわれず、最終的に魅力をより多くの人に伝えるということを意識できたと思います。

１年間という短い期間で私たちが織物産業に残すことのできるものは、顧客のニーズやそこに関係する情報であると春学期に気づき、最後までそうしたプロジェクトの本質を見失うことなく活動できたと感じています。９人という少人数で活動してきた分、イベントも大規模なものはできませんでしたが、少人数であったからこそ意思の疎通がなされ、自分たちがなすべきことを見失わなかったのだと考えます。本プロジェクトを通じて、メンバー全員が共通して物事の本質を捉え、それを達成するためのプロセスを考える力を身につけることができたと実感しています。

編集後記

こうして活動を振り返ってみると、あっという間の１年でした。思うようにプロジェクトが進まず大変なこともたくさんありましたが、こうしてやり遂げることができて本当に良い経験になりました。メンバーの皆さんはもちろんのこと、いつも支えて頂いた龍村先生、大久保先生、SA の野口さんには感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

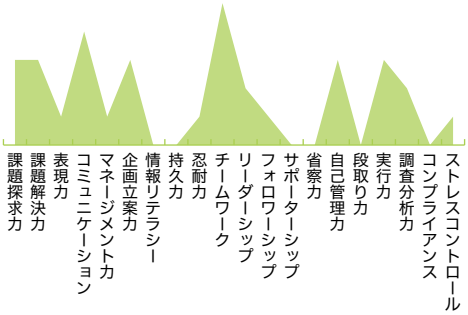
プロジェクトメンバー

西島 加於理（文2）　蔭山 はな（文2）　髙橋 夏（文2）　吉岡 潤（文2）　松本 桃佳（文3）　植松 真也（法4）
中島 誠哉（商3）　吉田 茉由（政策3）　野口 優香（SA）

プロジェクト活動 アンケート集計結果

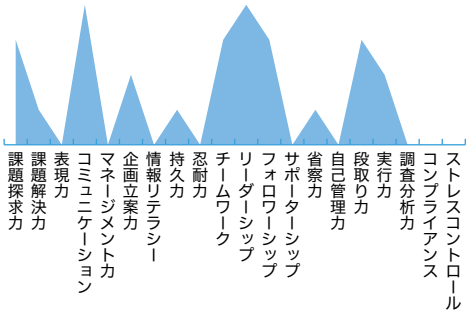
授業開始時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

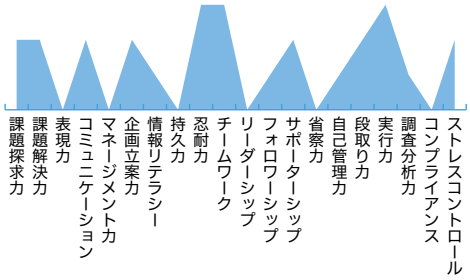


春学期終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

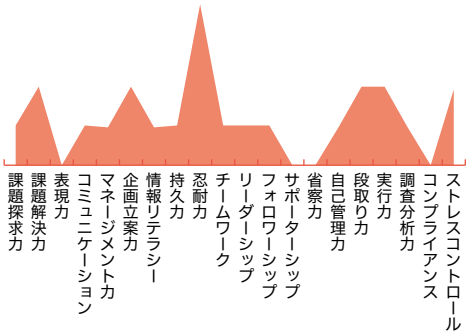
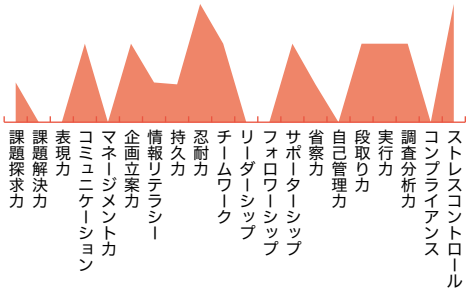


Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい



授業終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい



Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい